

思いやりのバトン

栃木市立栃木西中学校

二年

新村日奈子

女

「声かけた方がいいかな？」

その日は校外での部活動で電車に乗っていた。帰りが遅かったので、車内はとて混み合っていた。私は部活の仲間と、つり革につかまりながら話に夢中になっていたが、ふと、前に座っていたおばさんの声が耳に入ってきた。「あそこのドアの前に立っているおばあさん。目をつむって、白い杖を持っている？」おばさんの見ている視線の先を見ると、白い杖を持ったおばあさんが、手すりに身を寄せ

2

てつかまりながら、じつと立っている姿が目に入った。そのときに突然、「声かけた方がいいかな？」という思いが頭をよぎったのだ。すると、電車が発車して、電車がグラッと揺れた。

おばあさんは揺れる電車に体が倒れないように、必死に手すりにつかまっているように見えた。「あ」と思ったが、私もバランスをくずした。電車の揺れは私の体を前に傾けた。考える必要はなかった。電車の揺れに背

中を押されて、「よし。」と決めたとき、私は自然とおばあさんの方へ向かって歩きだすことができた。

おばあさんが立っている先に座席が少し空いている所があった。ドキドキしながらその席まで歩いて行って、隣に座っている女性に、「ここに一人座ってもいいですか？」

と尋ねた。私の心臓は周りに聞こえそうなくらい音をたてて、声も震えていた。そんな私に気付いた女性は優しい声で、

「どうぞ。」

と、言うてくれた。私は周りの人の迷惑にならないように、「すみません」と言いながら

おばあさんのもとへ向かった。そして、「大丈夫ですか。席を見つけたので一緒に行きましょう。」

と、勇気を振りしぼって声をかけた。すると、「あら、そう。お願いしようかしら。」

と、明るい声で返事をしてくれた。

私はおばあさんの手をとって席へ向かった。

その途中、周りの人は気を遣って、私たちに道を空けてくれた。私は、みんなに感謝の気持ちでいっぱいになった。

おばあさんは席に座ると、「ありがとうね。お譲ちゃん。他の方たちもありがとう。」と、みんなにお礼を言っていた。おばあさんも、周りの人たちも、みんな笑顔になっていた。そして私も自然と笑顔になった。

みんなが笑顔になった

6

時、気付いた。最初に、私が立っていた前に座っていたおばあさんが、目の不自由なおばあさんに気付いたのは思いやりから。その思いやりが、席をずらして空けてくれた女性につながり、その女性の思いやりが周りの人たちを空けてくれた思いやりにつながっていた。まるで思いやりのバトンのように次々につながって、みんなが笑顔になった。そう思った時、私は最初に教えてくれたおばあさんのところに急いで向かった。